

「福島復興とSDGs」

特定非営利活動法人しんせい

理事長 富永美保

誰一人とり残さない

2011年（平成23）3月11日、東日本大震災・原発事故発災。放射能の影響を受けた双葉8町村を中心とした12万人もの福島県民が故郷を離れ避難生活を余儀なくされた。避難所が閉鎖し、避難住民が仮設住宅に移る時期、ともすると障がいを持つ方々がとり残されそうな状況が見え隠れし始めた。「この混乱の中、何ができるのか?」「障がいを持つ方々も復興の一助として活躍出来れば、決してとり残されないはず」。私たちはこのような仮説をたて、現在も障がいのある方々と共に福島復興の着地点を探し続けている。当時、原発事故により福島が抱えた課題はあまりにも大きく、いち団体やいち個人で課題を解決することはとうてい不可能であった。障がいのある方々の取り組みも福島復興の一助となるために、私たちは福祉の垣根を越えて様々な団体と連携を組み丁寧に対話を続けながら、自分たちが持ち得ない専門的な知識や技術を学ぶ機会をつくり、たくさんの支援者の力を借りて福島の現状を伝える製品をつくった。この取り組みはSDGsの目標17にあたりと知ったのは後の事である。当時は同じ課題を抱えた仲間や、支援の手を差し伸べてくれたNGO/NPOや企業のを借りて何とか前に進むことに必死であった。しかしながら、SDGsにある「我々の世界を変革するー持続可能な開発のための2030アジェンダ（以下、新アジェンダ）導入部4（誰一人とり残さない）この偉大な共同の旅に乗り出すにあたり、我々は誰もとり残されないことを誓う」

という一文を目にした時、私たちが経験してきた福島復興とSDGsが大きく重なり、福島の課題も地球規模の課題（貧困、格差、ジェンダー不平等、気候変動、大規模な自然災害、エネルギーなど）と複雑に絡み合っているのだと理解できた。そして、私たちがあゆむ福島復興も持続可能な未来を支える小さな一助になれるのではないかと考えるようになったのである。

障がいのある人も福島復興の一助に

しんせいは、「JDF 被災地障がい者支援センターふくしま」（2016年3月活動終了）の交流サロンとして2011年10月に活動をスタートした。1年を過ぎる頃からサロン参加者が大きく減り始め、その理由をたずねてみると「1人ぼっちで家にいるのもつらいけれど、毎日無理をしてお喋りすることはもっとつらい。避難前のように仕事がしたい。自分の役割が欲しい」などの声が多く聴かれた。そんな声を受け、2013年（平成25）からはサロン活動を縮小し、就労に力を入れ始めると多くの方がしんせいにやってくるようになった。しかし、仕事は簡単にはみつからずひと月700円程度の支払いしか出来ない状況が続いた。

その頃、避難先で福祉事業所を再開した仲間たちも「新しい土地で仕事がみつからず、工賃の支払いが難しい」と同じ悩みを抱えており、しんせいが事務局を務め「障がいを持つ方々の仕事が福島復興の一助となるように」と13の障がい福祉事業所が協働でプロジェクトを立ちあげた。幸いにも企業、NGO/NPO、市民など、社会の様々な立場のみなさまから惜しみない協力をいただき、一年の準備期間を経て福島の現状を伝える物語を添えた「魔法のお菓

子ぼるぼろん」という焼き菓子が完成し、海外にも販売するまでとなった。このプロジェクトは同じ課題を持つ13の福祉事業所との連携に留まらず、企業やNGO・NPO、市民の力が加わったことで、それぞれが持つ専門性や資源をダイナミックに活用できる素晴らしい協働体をつくりあげた。

NGO/NPOはプロジェクトに必要な資金を調達し、福祉事業所が自立できるよう物心両面で活動を支えた。企業はそれぞれの専門性を活かし、菓子をつくる技術や販売する手段を支援、またマルシェというカタチで製品を買い支えた。何より福島を応援しようという市民のロコミの力は絶大なものであった。13の福祉事業所に通う障がいのある方々も「お菓子を焼く事業所」、「箱を折る事業所」、「発送作業をする事業所」、「営業してお菓子を売る事業所」など役割に分かれて一生懸命働いた。いつしか彼らは支援を受ける側から役割を持った対等なパートナーとなり、自分たちも福島の復興を支えているという「誇り」もを手にすることができたのである。

「魔法のお菓子ぼるぼろんプロジェクト」は2018年にその役割を終え発展的解散、現在13の福祉事業所はそれぞれの地域で自分たちに合った仕事で自立の道を着実に歩んでいる。東日本大震災・原発事故はとても悲しい出来事でしたが、福祉の垣根を超えて社会の様々な方々と「協働で仕事をつくる」という特別な経験が出来たことはたいへん幸運なことであった。このプロジェクト以降、様々な立場の団体と力を合わせて事業をつくる「協働」がしんせいの基本のスタイルとなっている。

SDGs バッチをつくる

しんせいのすすめる協働のひとつとして、「SDGs 市民社会ネットワーク（以下 SDGs ジャパン）の会員バッチ」を紹介する。「SDGs に取り組む市民活動の象徴となるようなバッチをつくる」というプロジェクトに参加したのは 2018 年のことでした。「誰一人とり残さない（Leave No One Behind）」という精神を表現するためにデザインや材料などを、会員、NGO/NPO、民間企業が 1 年をかけ丁寧に検討した。しんせいで働く障がいのある人も「自分たちの生きる社会」について考え、「私たちは凸凹な社会に生きている。それが自然で良い。だから楽しい。」などの意見をまとめて SDGs ジャパンに届けた。こうして生まれたバッチがこちらである。



SDGs バッチ（特定非営利活動法人しんせい×山口産業株式会社）SDGs 市民社会ネットワーク

<https://www.sdgs-japan.net/product-page/sdgs%E3%83%90%E3%83%83%E3%83%81>

「人・環境・社会にやさしい革」作りをめざす山口産業株式会社より提供された「やさしい革」を土台に、「Leave No One Behind」からとった「L、N、O、B」の文字も刺繍で施し、「だれひとりとり残さない社会」がしっかり表現されている。実は、このバッチにはもう 1 つ協働の物語がある。制作を担当している聴覚に障がいのある石田健太郎さんは、原発事故の影

響で葛尾村から避難者である。「私は刺繍ミシンの仕事がどうしてもしたいとスタッフにお願いしました。スタッフはどうすれば私が上手に出来るかをブラザー工業の方に相談をしたそうです。早速、ブラザー工業の担当者が名古屋から郡山まで来てくれ、上手に刺しゅうができるよう一緒に考えてくれました。たくさん注文が入り、私は毎日忙しく仕事をしています。刺しゅうミシンが壊れないように、ブラザー工業に教えて頂いたメンテナンスは毎朝しています。」と石田さんは話す。



刺しゅうをする石田さん

協働は福祉に何をもたらすか

このように、しんせいの事業はSDGs目標17「協働」が根幹を担っている。「協働」は参加するさまざまな団体の持つ文化や価値の違いを尊重しつつ進行するために丁寧な対話が必要となるが、手間や時間をかけた分、大きな成果も得られる。原発事故の混乱のなか、障がいのある方々がとり残されないようにと「福島復興を担う役割」をつくったことで、彼らは支援を受ける側から対等なパートナーとしてプロジェクトを支える側になった。魔法のお菓子ぼるぼろんやSDGsバッチからもわかるように、障がいのある方々が「私も社会を担う一員である」という実感と誇りを持たせたことはこの協働のひとつの成果としてあげることが

できる。また、「いきいきと活躍する彼らの姿は、わがことのように誇らしい」「彼らと働く喜びを分かち合えることに感謝する」と言ってくれる協働のパートナーの意識変化も大きな成果といえるであろう。新アジェンダのパートナーシップには「我々は、強化された地球規模の連帯に基づき、最も貧しく最も脆弱な人々の必要に特別の焦点をあて、全ての国、全てのステークホルダー及び全ての人々の参加を得て、再活性された『持続可能な開発のためのグローバル・パートナーシップ』を通じてこのアジェンダを実施するに必要とされる手段を動員することを決意する」と書かれてある。しんせいはこの一節をしっかりと胸に刻み、これからも社会の様々な立場の人と福島復興の着地点に向かってすすむ。障がいのある方々や弱い立場にある方々の力も持続可能な未来の一助となることを心から願いつつ。